

ハイデルベルク信仰問答より

問17 なぜ、その方は、同時に、真の神でなければならないのですか。

答え それは、主が、その神性の力によって、神の怒りの重荷を人間として担い（イザヤ53:8）、私たちのために義と生命を回復させ（使徒2:23-24、ヨハネ1:4）、それを元通りにするためであります（ヨハネ3:16、Ⅱコリント5:21）。

前回学んだ「問16」では、主イエスが「真にして義しい人でなければならない」ということが強調されていました。主イエスはまぎれもない人間の一人となり、私たちの長兄となって神の許へ連れて行ってくださるために世に来られたと。

ところが、今日の「問17」では、主イエスが「真にして義しい人」であるだけでは十分ではないということが明らかにされています。この方は同時に「真の神でなければならない」のです。主イエスは、神と人、一人二役を100%（いえ、200%）こなし切る方でなくてはならないということです。

問17の答えには三つの要素があります。主イエスが「神でなければ」できなかった役割の総括と言ってもよいでしょう。

①神ご自身として神の怒りを担う

②私たちに義と生命を回復させる

③それを元通りにする

という

「回復」と「元通り」は同じことなので、
本メッセージでは一つにまとめます。

まず、第一の要素を見てまいりましょう。「神の怒りを担う」ことは、一介の人間には決してできないことでした。それは、人の罪に向けられた神の怒りが大きすぎて、誰にもそれを担い切ることができない（耐えられない）からです。聖書の多くの箇所、神の審きには誰も耐えられないことが述べられています。

- ・ 罪人たちはシオンでわななき、神を敬わない者は恐怖に取りつかれる。「私たちのうち、だれが焼き尽くす火に耐えられよう。私たちのうち、だれがとこしえに燃える炉に耐えられよう。」（イザヤ33:14）
- ・ わたしがおまえを罰する日に、おまえの心は耐えられようか。おまえの手は強くありえようか。主であるわたしがこれを語り、これをする。（エゼキエル22:14）
- ・ 主は、ご自身の軍勢の先頭に立って声をあげられる。その隊の数は非常に多く、主の命令を行う者は力強い。主の日は偉大で、非常に恐ろしい。だれがこの日に耐えられよう。（ヨエル 2:11）
- ・ だれがその憤りの前に立ちえよう。だれがその燃える怒りに耐えられよう。その憤りは火のように注がれ、岩も主によって打ち砕かれる。（ナホム 1:6）
- ・ だれが、この方の来られる日に耐えられよう。だれが、この方の現れるとき立っていられよう。まことに、この方は、精錬する者の火、布をさらす者の灰汁のようだ。（マラキ 3:2）
- ・ 御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。（黙示録 6:17）

この預言者たちは、澄み切った霊の目で自らの罪を見つめ、自分自身を含め、神の民全体が、そして人類全体が「最後の審判」の日に神の審きに直面する事実を認め、慄いたのです。

ミケランジェロが描いた「最後の審判」では、その中央におられるキリストが審判者となって、審きの手を挙げ、丸裸にされた人間一人ひとりの永遠の行く末に判決を下している姿が描かれています。この方の御前では、自分の人生のすべてのページが開かれ、神の義にふさわしいかどうか判断されるのです。



少し私の話をさせていただきます。幼少の頃から聖書に接してきた私を毎晩脅かしていたのは、死後の審きでした。ある悪習慣をやめられなかった私は、確実に自分の身に訪れるであろう審きの日を思い、震えながら眠りに就いたものです。救い主を知らなければ、人は自分を守るものを何も持っていないのです。しかし、そのような私の人生に救い主が来てくれました。

問17の答えの第二の要素は、主イエスが私たちに「義と生命を回復（元通りに）してくださる」ということです。「回復」ということは、人間には元来「義と生命」というものがあつたということの意味するでしょう。しかし、それを失っている。生まれつきそれを持っていない。本当は持っていないはずのものが伴っていないということです。罪ある人間として生まれたすべての人に「神の義」「永遠のいのち」がないということです。だから罪を犯してしまう。神の祝福にふさわしくない生き方をしてしまう。

このような私たちに「神の義」を与えることができるのは、もちろん神以外にはあり得ないでしょう。主イエスはなぜ神ご自身でなくてはならなかったか。それは、私たちに「神の義」を確実に与えるためだったのです。私たちの罪の一つ残らず担い、本来ご自分が持っておられた「神の義」（キリストの義）を確実に付与するためでした。主イエスを信じる人は、「キリストの義」という衣をすっぽりと着せられ、どこを探しても罪のシミが見当たらない存在となるのです。その「罪のシミ」は人の目には見えるでしょう。悪魔の目にも見えるので、それは彼が私たちに訴える要素となるでしょう。しかし、神の目には見えないのです。主イエスの「義の衣」はそれほどまでに輝いており、私たちのすべての罪を隠し、主イエスの血はすべての罪をきよめる力を持つのです。

もう一度「最後の審判」の絵を見てみましょう。主イエスを知らなければ、これは終わりの日に自分を審くキリストの恐ろしい絵でしかありません。しかし、主イエスを信じる人にとっては、何とこの審判者自身が私たちの弁護者でもあられるのです。「私がいるから大丈夫だよ」「私があなたを守っているよ」「あなたは神の御前に生きた存在なんだよ」。そんなやさしい御声が聞こえてくるようです。